

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 4 月 17 日	
所属部局・職	霊長類研究所社会生態分科・修士課程学生
氏名	石塚真太郎

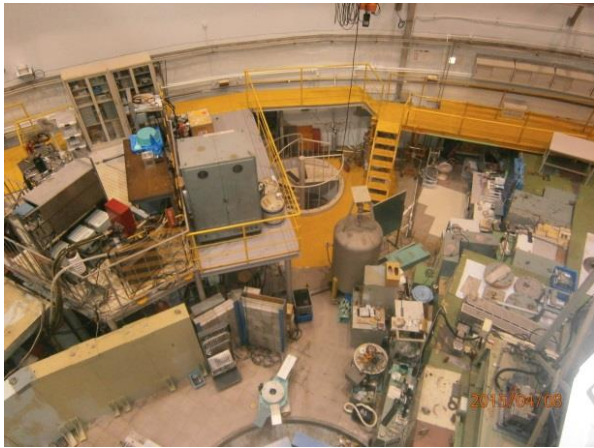
1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
原子炉実験所・瀬戸臨海実験所・京都市動物園・生態学研究センター・霊長類研究所・JMC
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
インターラボ
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 4 月 6 日, 8 日 ~ 平成 26 年 4 月 10 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
増永博士, 大和博士, 田中氏, 酒井博士, 中村博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回のインターラボは、以下のような行程で各研究施設を訪問した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 4/6(月) ウェルカムレクチャー、新歓コンパ ● 4/8(水) 原子炉研究所、瀬戸臨海実験所 ● 4/9(木) 瀬戸臨海実験所 ● 4/10(金) 京都市動物園、生態学研究センター ● 4/11(土) 霊長類研究所、Japan Monkey Center <p>ウェルカムレクチャーでは、様々な研究室に所属する若手研究者から研究の紹介をしていただいた。これまでに学習してきた内容に近く、講演者に質問できた研究もあれば、ほとんど内容を理解できない研究もあった。他分野の研究をいかに自分の研究に応用できるか、あるいは他分野の研究の中からいかに自分の研究の題材を見つけるかが大切だと思う。本レクチャーでは伊藤公一さん(生態学研究センター所属)の講演を受け、私のこれからの研究とどう結びつけるかはまだ思いついていないものの、数理モデルを有効に使えるようになることは大事だと感じた。</p> <p>原子炉実験所は、具体的な内容については紹介の半分ぐらいしか理解できなかった。癌治療など、医学に近い内容の研究が行われていると感じた。自分の関心だけで科学研究を行うだけでは認められず、いかに人間社会に還元していくかも大切なことだと改めて感じた。今後、研究を行う際も、それを忘れないでおうと思う。</p> <p>瀬戸臨海実験所は、一番印象に残った。白浜の素晴らしい自然を感じることができたことに加え、そこでの説明によって海洋生物の神秘を知った。生活史が逆転しており、「若返る」ベニクラゲ、白浜に生息するヨコエビの 1/3 は新種であるという話は特に印象に残った。また、懇親会時、教員が現地でも釣ったというアオリイカはとても美味だった。自然と関わり合いながら行うことができるここでの研究は、とても楽しいものだと思う。このように自然と「一体」となることは、私のこれからの海外のフィールドワークでも必要となることであろう。白浜にはまだまだ未知の種がたくさん存在しており、見つかっている種でも生態はほとんどわかっていない。私たちの日本の自然を理解するため、これらが明らかにされたいと思う。</p> <p>京都市動物園については、私は学部時代にずっと通っていたので、比較的知っている内容の話が多かった。一方で、工事中の「京都の森」は初めて訪れた。来園者の道が京都の里山を感じさせるものであることや、その中での人工川を動物園全体の水引きに用いるなど、随所に工夫が凝らされていた。私はこれまでに訪れたことのある約 30 の動物園を見る限り、敷地面積が狭いという問題を抱える動物園にとって、京都市動物園の展示は良いモデルだと思う。私は将来動物園でキュレーターを務めることを望んでいるが、国内外の様々な動物園の改善を考える上で、京都市動物園は改めて参考になると思った。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

生態学研究センターでは、雨天のため、森と圃場の見学ができなかったのが残念だった。しかし、ここでは共同研究の大切さを学んだ。生態研では、生態学という一つの学問分野に対し、それぞれの研究者が数理はモデル、ゲノム、フィールドワーク、同位体等、様々な切り口から取り組んでおり、これらの研究者が、毎日同じ施設で机を並べている。このような環境が、研究者間の共同研究につながり、良い研究のきっかけになると教わった。私が所属する霊長類研究所では、ここと同じ環境がある。将来、私一人では扱えないような手法を用いれば新たな知見が分かりそうな時は、是非他の研究者の手を借りようと思う。

霊長類研究所については、この実習以前により詳しいガイダンスを受けたので省略する。最後の Japan Monkey Center については、ここもこれまでに何度か来たことはあった。ここで京都市動物園を重ね合わせて思ったのは、動物園と研究機関が提携することはとても意味のあることだということだ。ここで行われる研究を広く伝えていくことは、動物園の目的である保全や教育に役立つものだと思う。また、一つの動物園で展示する動物の分類群を少なくすることは、教育の上でも意義のあるものだとも思った。同じ分類群の動物を集めると、多様な分類群の種が飼育されているよりも、説明の手間が省けることに加え、より詳細な比較学習ができる。また、進化的に近縁であるため、様々な食物を揃える必要がなくなることや、同じような環境エンリッチメントを施しやすいなどの利点もあるだろう。今回の実習では比較的「理想型」の動物園を回ることができたが、今後動物園の改良を考えていく上では、まだまだ環境エンリッチメント等が考えられていないような「非理想型」の動物園のことを考えることも必要だろう。これらは今後の課題とし、もっと学習していきたい。



原子炉実験所の様子



京都市動物園のゾウ



白浜の海岸で見つけたウニ

6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS リーディング大学院プログラムの支援を受けて遂行できました。PWS プログラムおよびインターラボスタッフの皆様に感謝申し上げます。